



狼男



川崎ゆきお

台風一過でよく晴れた日だ。

「昨日は大変でしたなあ」

「被害はないが、私には出ていた」

「川の氾濫でも見に行きましたか。それとも用水路の状態なども。夏台風はやっかいですからな。稲の穂がそろそろ出ようというときに、逆に水が入る。これは だめです。用水路に田の水を逆に流すようにしています。そういうのを見に行かれたのかな」

「そこで、怪我をしたわけじゃない。それ以前に、そんな気になれん。田圃より、わしの状態がおかしくなる」

「そういえば、台風が近付くと気が重くなると言っていましたなあ」

「そんな軽いものじゃない。頭が痛くなる程度ならいいが、気が滅入るんだ。体よりも気が重くなる。これは横になっているしかない」

「でも、台風は去ったので、もういいでしょ」

「おかげさんで、しかし昨日は重なった」

「何がですか」

「台風と満月がだ」

「はい」

「満月の日もだめだ。同じ症状になる。昨日は重なって、もう少しで何かになるところだった」

「何になるのですか」

「月の引力を感じる」

「まさか」

「狼男」

「それは違うでしょ。気圧の問題でしょ」

「そこから、プツンとってしまうことがあるんだ」

「いきそうになりましたか」

「産毛が立った」

「髭や、髪の毛は」

「少しボリュームアップだ」

「しかし、それで狼男になった例はないじゃろ」

「まあな」

「あちこちに狼男になった人がうろうろしているはず」

「だから、形じゃない。狼に変身するわけじゃない。気持ちいだ」

「狼男って、強そうですぞ。それに暴れてるイメージもありますなあ。しかし、しんどくて横になっていないとだめなほどでしょ」

「だから、いっそ変身した方が楽になり、元気になる」

「しかし、そのときは狼男になってしまうので、だめでしょ」

「だから、静かにしている。台風や雨もきついが、月もきつい。それが重なることは希だ。曇っておれば月は見えんので気付かんのだがな。怖いのは夜半に雲間 から月が出る晩だ。細い月なら

いい。満月に近い大きな月が危ない。昨日はそれが重なった。だから、危なかったんだ」

「でも、今朝は大丈夫なんじゃろ。もう回復したのだろ」

「ああ、しばらく、晴れそうなのでな。それに夜は出ないことだ。まだ月が大きい」

「カーテンも閉める必要がありますなあ」

「その通り。わしの親戚で、田圃の水を見に行ったとき」

「はい」

「大雨のときですね」

「そうだ。それを見ているとき、雲間から満月が」

「なりましたか」

「ああ、できあがったらしい」

「その血筋を引いているのですね」

「そうかもしれん」

「その親戚の方はどうされました」

「野犬にかまれたことになった。山犬様の祟りということで終わった」

「そのあと、どうなりました」

「行方不明」

「はい。山犬様に御山へ連れ去られたと、子供の頃に聞いた。実際どうなったのかは、誰も教えてくれないが」

「あるんですねえ、そういう物語が」

「村のはずれに山犬石がある。この村には、何十年かに一人は出るらしい」

「月見などできませんねえ」

「雨が降る前の月見はな」

「はい」

この語り手、狼男ではなく、狼少年かもしれない。

了